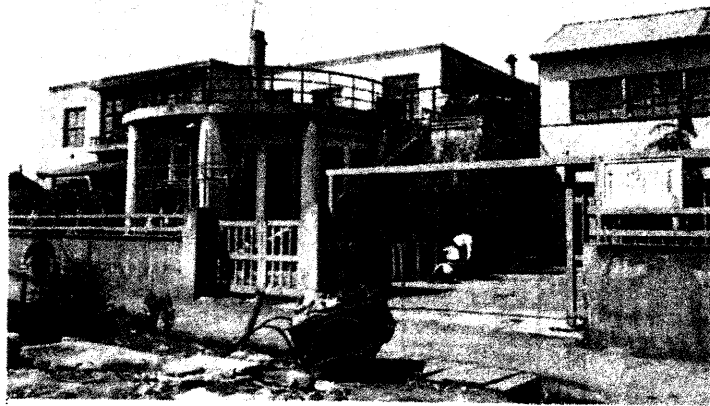


一 都立白金保育園の開設



調理室 かまど



白金保育園園舎

所	在	港区芝白金三光町二七番地(現 白金三丁目一〇番三号)
開設		昭和二十四年八月二十三日
構造・規模	敷地	二三五坪(七七七・二 <sup>m</sup> )
	建物	鉄筋コンクリート造二階建(民生館・共同作業所併設)

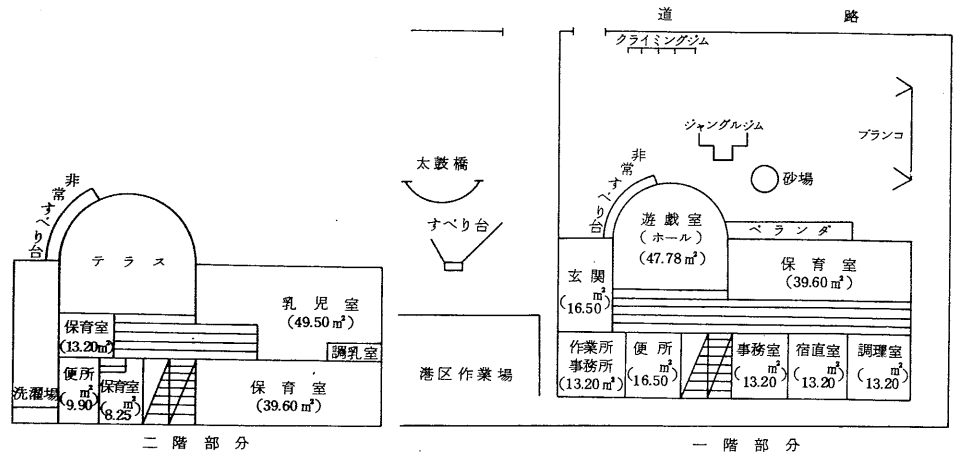
保育園一、二階部分延一二二・二坪(四〇三・四<sup>m</sup>)

開設当初は一階部分のみであったが、昭和二十八年七月に図のように改修された。

開設までの背景

昭和五年四月東京市芝区白金三光町二七番地(現 白金三丁目一〇番三号)に鉄筋コンクリートのモダンな二階建の市民館と幼児保育部が開設され、方面事業の一つとして貧困家庭の子どもたちの保育を行った。その後昭和十八年には、戦時託児所となり、戦時下の児童の保育にあたってきたが、空襲を受け、鉄筋造りの外郭だけを残して施設の大半を焼失し、事業も中断された。

白金保育園平面図



開園当時の状況

当初、保育園は白金民生館、白金共同作業所と併設されていた。事務室は、別々になっていたが、同じ建物であり、廊下、二階和室、屋上などが共用であった。

戦後の窮乏や混乱の生活の中で、復興に忙しい大人から放置された子どもたちにとっては焼け跡が遊び場であり、また、親を失った子どもたちの中には靴みがきや新聞売りをするものもあった。このような子どもたちの対策として、東京都は昭和二十年十二月から保育園再開に至るまでの間、野外保育を行っていた。遊びに飢えていた子どもたちの参加は日ごとにその数を増し、託児所再開を望む声が一段と高まった。こうしたことから東京都は、昭和二十一年三月、東京都保育園使用条例を制定し、保育園を開園させた。

戦後間もないころの四ノ橋通りはまだがれきの山が随所に積まれ、バラック建が軒を並べ、焼トタンにむしろの仮小屋の家もあった。

このような中で、焼失した白金託児所の建物には、住居を失った人々や引揚者が住んでいたが、その後、都営住宅に移った。建物の基礎が良かったので、内装し、昭和二十四年八月、地域の人々の要望で、都立白金保育園を開設した。

開設当時の児童定数及び職員数

児童定数 三歳児 五歳児 六〇名

職員数 園長、保母二名、作業員、計四名

園舎は、コンクリート肌がむき出しで、室内は薄暗く、園庭は樹木もない殺風景なものであった。建物は壁に塗料を吹きつけてあるが、雨漏りはする、壁は落ちるといった状態であった。便所は汲み取り式で、その上、汲み取り回数も少なかった。水分だけでも汲み取らねばならず、作業員はその作業も行った。調理室は、浴室跡のため、水道も低く、かまどで薪を燃やしたり、練炭コンロで調理した。また、調理台は、小学校から譲り受けた古い机を使い、食器はアルマイト製のものを使用し、粉石けんで洗い、煮沸消毒をして衛生に気を配った。

玄関わきの円形ホールの奥にあるウナギの寝床のような細長い一部屋が保育室で、それを戸棚で仕切って二部屋とした。そこで子どもたちに少しでも明るさと夢をと装飾を考え、環境を整えた。備品は、机と椅子、オルガン一台だけで、教材も乏しかったため、童話研究に熱心な園長の話や保育の工夫で保育が行われた。また、園外散歩（魚らん坂、有栖川宮記念公園など）も多く取り入れた。当時は、七夕、ひなまつりなどの伝統行事が盛んに行われ、夏には臨海保育（葉山、森戸）を行っていた記録がある。

また、当時保育は、区の職員と一緒に雷神山で太鼓を打って地域の子どもを集め、野外保育も行っていた。殺風景な園庭にも、役所、作業所の職員が手伝って、花だんができ、近隣から、藤、八つ手などの樹木をもらったり、ジャングルジム、ブランコも入り、次第に保育園の庭らしくなった。中央にある円形砂場は、夏は砂を出し、プールとして使用した。

園児の家庭もそれぞれが大変な時代ではあったが、保護者は、保育園に対して大変協力的で、交代で掃除に来てくれた。行事の時には、職員と共に遅くまで手伝ってくれたりもした。また、下着、衣類などの寄付やお金を集めて必要だと思ふものを買って来てくれるなど、それぞれができる範囲で協力してくれた。

地域の方からも、ピアノの寄付があったり、また、石炭も思うようにならない時に子どもたちに寒い思いをさせてはと石炭を差し入れてくれたり、地域ぐるみの協力もあった。